高橋晃二郎の鬱

駄作神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
高橋晃二郎の鬱

【Ｎコード】
Ｎ９３３７Ｊ

【作者名】
駄作神

【あらすじ】
「将来の夢はニートです。」

二次元を愛し。三次元を嫌う。
そんな、世界に絶望した少年、高橋晃二郎（たかはしこうじろう）が普通に青春を謳歌する普通の高校生、高木若葉（たかぎわかば）に振り回されつつも振り回す。
そんなバカで不思議な話です。

プロローグA　高橋晃二郎の溜息（前書き）

駄文長文失礼します。
間違いなんかがあったら言って下さい。
なるべく早く更新したいと思います。

プロローグA　高橋晃二郎の溜息

死ね。

死ね。

リア充なんて爆発すればいい。

なんでリア充生きてんの？　なんでリア充死なないの？

お前らなんで学校行くの？　面倒じゃん。

お前らなんで仕事すんの？　ニートでいいじゃん、楽だよニート。

お前らなんで恋愛とかすんの？　んなもん病気みたいなもんだって。

世界なんて滅びればいいんだ。滅びないなら、せめて二次元に繋がれよ三次元（リアル）。

本当に使えないよな。

リア充なんて・・・・・・　死ねばいいのに。

プロローグＡ　高橋晃二郎の溜息（後書き）

続きは暇なときにでもどうぞ。

プロローグB　高木若葉の独り言（前書き）

駄文長文失礼します。

プロローグB　高木若葉の独り言

世界は希望に満ちている。

俺は少なくともそう思っている。

学校は面白いし、友達はユニークな奴らが多くて毎日暇しない。
部活は野球部に入っている。
練習は厳しいし、毎日ボロボロだ。けど楽しい。
毎日みんな笑顔で。
毎日が充分充実している。
世界は希望で満ち溢れている。

将来の夢とかはまだ決まってない。
ただ、人の役にたつ仕事がいいな、と思う。
人類皆兄弟。
人を助けた分だけ自分も救われる。
そう思う。
世界は希望で満ち満ちている。

そう思う。

いや、正確に言うのならばそう思っていた、だ。
あいつに会うまでは。
世界の絶望をすべて凝縮し、収縮し、練り固めて人間の形にしたような。
そんな存在に。

高橋晃二郎に会うまでは・・・・・。

プロローグB　高木若葉の独り言（後書き）

続きは暇なときにでもどうぞ。

第1話A　高木若葉の出会い（前書き）

駄文長文の駄作失礼します。

第1話A　高木若葉の出会い

「将来の夢はニートです」
俺の後ろでそんな自己紹介が聞こえた。まぁ自己紹介にしてはあまりにも奇妙で、今世紀最大と言っても過言ではないくらい奇怪な言葉が聞こえてきたわけだが。

俺の後ろ。別に美少女が座ってるわけでも、近年稀に見るイケメンが座っているわけでもないその席にはメガネを掛けた少し根暗っぽい男子が座っていた。
現在現状2年9組。新学期、新学年の初登校日だ。多少知っている面々がいるにしても、やはり新しいクラス。まだ一度も話したことのない奴が沢山だ。そして、そんな俺の心情を知ってか知らずか、担任はホームルームの時間を使い、自己紹介をしようと提案してきた。
まぁその提案にわざわざ逆らう奴はいなく、順調に前の席から自己紹介が成されていった。
俺の番。まぁ適当に名前と好きなものとか、部活のことなんかを話して終わった。
椅子に改めて座りなおし、緊張がほぐれたのを確かめる。小学生の時から何度か挑んできた状況だが、やはり何度繰り返そうが変わらず緊張してしまう。当たり前といえば当たり前だ。
この自己紹介はクラスにこれから溶け込めるかどうかの、第一印象を決める場だ。ここで滑ったり、失敗したりすると1年間は一人飯という状況になる。それはご勘弁願いたい。
と、そんなことに思いはせていた時だった。例の奇妙で奇怪で奇知外な台詞が俺の後ろから聞こえたのは・・・。
「将来の夢はニートです」
率直な感想を言おう。コイツは阿呆か？

さっきも言ったが、この最初の自己紹介はその人物の第一印象を決めるものだ。そこで将来ニート宣言してどーする！？
なにか事情があるのか、何も感情がないのかは知らないが。
それにしたって意図がわからんかった。意味がわからんかった。もし、コイツの行動に意味があるのなら、それはまるで人を自分に近づかせないようにする予防線のように感じられた。

「さっきのはギャグか？」
ホームルームも終わり、とりあえず今日は解散となると、俺は後ろの奴にそう尋ねた。
「何の話だ？」
そもそも覚えてないらしい。
「さっきのニートがどうとか」
「あぁ、アレね。別にギャグじゃないよ、本気だ」
どうやら本当に本音で本気らしい。
「楽だろニート。みんな一度は憧れるよな」
「よな・・・って、言われてもな」
正直、どう答えたら良いのか分からなかった。
その目の前の少年のメガネの奥の瞳の奥に、なにか暗い闇みたいなものを見たからだ。
「君さあ、生きるの楽しい？」
唐突な質問。なぜかは知らないが、それは少年の心の底からの質問に思えた。素直に答えることにする。
「あぁ楽しいよ」
「・・・ふぅん」
素っ気ないなぁ。そっちから質問してきたくせに。
俺がそんな風に思っている間に少年は帰りの仕度が済んだらしく、鞄を手に持ち、廊下に向かっていく。
「お・・・おいっ！！」
「ん？」

少年が振り返り様にこちらを見る。だが果たしてなぜ俺はこのとき少年を呼び止めたのか、自分でも分からなかった。
「何？」
多少苛立った口調で少年が言い放ってくる。一方、俺は何を話したら良いか分からず色々と考察を続けていた。
そうこうしているうちにどうやら少年の我慢の糸が切れたらしく、また踵を返して、廊下へと向かう。
何か言って引き止めなければ。なぜかは分からないが、俺の中にそんな感情が出現した。
「な・・・名前は！？」
自分を阿呆だと思う。それは先ほど、自己紹介で聞いた情報じゃないか。
だがしかし少年は足を止め、こちらを振り返り、新めてその名前を言った。
「高橋だよ。高橋晃二郎。別に覚えなくて良いよ、むしろ忘れてくれ。」
そう言って高橋は廊下へと出て行き、階段の曲がり角で姿が見えなくなった。

不思議な奴だったな・・・。
それが俺の高橋晃二郎に対する感想だった。
そしてこれが・・・・・・
俺と高橋晃二郎の出会いだった。

第1話A　高木若葉の出会い（後書き）

ありがとうございました。
続きは暇な時にでもどうぞ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9337j/

高橋晃二郎の鬱

2010年10月9日06時40分発行